

学芸総合誌・季刊『環：歴史・環境・文明』：特集「日米安保」を問う 藤原書店、Vol. 41／2010年

「日米安保」の新しい問い方を目指して

岩下明裕

日頃、日本の論壇にあまり関心を持たず、新聞時評や総合雑誌をほとんど読まない私だが、学芸総合誌『環』から執筆依頼を受けたときに、そのテーマが「日米関係」であったことに興味を持った。『中・ロ国境4000キロ』（角川新書）、『北方領土問題』（中公新書）などの著者として世間に知られる私への寄稿依頼は、その半分以上が北方領土問題を中心とした日ロ関係、残りの大半がロシア外交一般、そして中国、中央アジア、その他ユーラシア地域の情勢にかかわるものと続く。

どうして『環』の編集者が私に日米関係について原稿を頼む気持ちになったのかは不明だが、私がブルッキングス研究所の客員研究員を終えて札幌に戻った後に組織した、スラブ研究センターとの共催シンポジウム「日米同盟：北東アジアを越えて」（2009年5月）、「原子力カルネサンスと日米同盟：新しい市場の発見と核拡散防止」（2009年10月）の記録（『スラブ研究センターレポート』）、「『北東アジアを越える日米同盟』を議論」（『毎日新聞』夕刊、2009年9月2日付）などを読んだのだろう¹。

さて、『環』に寄稿した私のエッセイそのものの評価は読者に委ねたいが、ここでは私が読者としてこの特集号をどのような感想をもったかについて記してみたい。第1に、本特集はもともと日米安保50周年を記念して編まれたものだと思われる（特集の枕：106頁）。しかし、密約問題と普天間を中心とする沖縄の基地問題が政治やメディアの焦点となるなかで、この2つを軸とした構成となり、とくに沖縄が今後の同盟の行方について鍵となる以上、これが本特集でもっと大きな位置づけをもつことになったに違いない。普天間問題がこれほどまでに政治化しなければ、屋良朝博・沖縄タイムス編集委員の『砂上の同盟』が本特集で何度も言及されることはなかっただろう。2010年3月にグローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」と東西センター・イン・ワシントンが共催したシンポジウム「日米同盟：地域的安全保障と沖縄」で報告者として登壇した屋良の名前を、私が自分のエッ

¹ 実はロシアとほぼ同等に近い年月をかけて韓国とつきあうのみならず、「日韓同盟論者」を自認する私なのだが、いままで北朝鮮問題や日韓関係で取材を受けたことは皆無であり、また10年以上も『琉球新報』や『八重山毎日』を購読しているにもかかわらず、沖縄や日米関係で何かのコメントを頼まれた経験もない。ただ「専門家」としてこれらの地域やテーマに直接関わることはなかったにもかかわらず、私のかの地への古くからの関心は、いま「ボーダースタディーズ」を日本で組織していくのに、大きな力となっている。この経験や問題意識を欠いていたら、北のボーダースタディーズを、福岡・対馬・釜山といった西の地や台湾・八重山・那覇の南の海でネットワーク化していくことは到底、できなかつたに違いない。南九州で生まれ育ち、北九州で研究生活に入った私が今、北海道でこのような仕事を手がけているのは、ある種の必然だと考えている。

セイ（「同盟」の新しい地平を求めて）で紹介するのは当然としても（本書185-186頁）、ご自身の寄稿（「沖縄米軍基地の戦略的価値」という神話：本書214-219頁）以外に冒頭の座談会（渡辺靖+松島泰勝+伊勢崎賢治+押村高）で3度（134、150、161頁）も言及されるなど、屋良は実に圧倒的な存在感を示している²。沖縄の問題が、密約以上に本特集で強調されていること、本書の読者の大半が内地の人間だと思われる以上、これは本特集の時機にかなった意義を高めていると確信する。

本特集全体の構成もなかなかのものだ。ある意味で日米関係の歴史を語るにふさわしい三人の大御所による短いクリアな回顧を皮切りに、中身の濃い座談会、多岐にわたる論点を含むエッセイ、そしてコラムへとつづく、この流れるような展開は読み手を飽きさせない。また執筆者の多様な顔ぶれも特集の価値を高めている。政治家、論壇関係者、ジャーナリスト、研究者など、そのバランスのよさは一目瞭然である。実は私はこの手の総合誌を短時間で読むのは不得手なのだが、今回、一気に目を通すことができた。構成を含め、練りに練ったと思われる編集者の仕事の成果である。ちまたでよく出される一般書か研究書か位置づけがよくわからない論文集の編者と同様³、雑誌の特集号もまたその成否は編集サイドの力量による。この編集サイドの成功を執筆者の一人としてまずは喜ぶたい。

にもかかわらず、本書がそもそも安保50年の回顧として企画されたと思われることから、今後の日米関係を問うという視座については、消化不良感を抱いたことも実直に述べなければならぬ。第1に、そもそもの企画意図からみて仕方がないのだろうが、過剰な「歴史主義」がある。私があえて「主義」と書くのは、日本のアカデミズムが歴史重視の伝統が強く、何かを論じる際に、その出自や経緯、時代に応じた変化などを詳述する一方、歴史を相対化するかたちでの将来に向けての分析や政策提言に消極的なことに不満があるからだ⁴。本特集も、その意味では歴史や回顧にあふれている。密約問題が焦点のひとつであ

² 但し、本特集の少なからぬ執筆者が（アマゾンでさえ入手が難しかった）屋良記者の本を読むどころか、その存在も知らなかったと推測する。

³ だからこそ、出版社は、教科書として複数の異なる大学教師が執筆し、それぞれが自分たちの学生販路に責任をもてるケースを例外として、多数執筆による作品の出版に二の足を踏む。余談であるが、本プログラムの最初の研究成果の一つとして刊行した『日本の国境：いかにこの「呪縛」を解くか』（北大出版会）も、コンセプトのない単なる寄せ集め論文集のたぐいではないという私の度重なる説明は一蹴され、とある二つの大きな出版社からはお断りされた結果、アカデミズム系の大学出版会に引き受けてもらった（もっとも、単著ならば喜んで出すのだがとは言うてくれたのだが）。境界問題のような広がりのあるテーマをもつ本を単著で出す困難さを思うとき、この種の多数執筆による出版のチャンネルを守るため、鋭意、『日本の国境』のセールスに力を入れる次第である。

⁴ 私自身も、中ロ関係でも日ロ関係でも国境問題にかかわる歴史をフォローし、いくつかの著作では歴史叙述にかなり力を注いできた。ともすれば、私の作品を読んだ同僚たちは、私を冷戦史研究やアーカイブをもとにした二カ国間研究に誘いたがる。私がこれまでの仕事で、歴史を多少は勉強した理由は、一般に流布している歴史にかかわる言説を乗り越えるためには、史実的検証が不可欠なこと（例えば、北方領土問題の場合における「四島返還」言説）、一般にその経緯が十分に知られていないテーマについては、「勢力均衡」などの安易な枠組で理解させないために、歴史的説明が必要なこと（例えば、中ロ国境の関係における決定的な存在が無視され続けてきたこと）による。従って、私の作品の歴史分析は、あくまで未来に進むための前提作業として手を

る以上、それは理解可能なのだが、密約問題のポイントはそれが日本政府のなかで認められたということである以上、旧来の日米関係の歴史を決定的に書き換えるものではない。要するに、日米関係や安保の歴史はこれまでにある程度まで議論しつくされてきたのであり、本特集の一部がその再現に留まっているような印象を与えていることは残念である。ぜひ今回の続編として、例えば、機能的な（ファンクショナルな）論点を発展させた他国のケースとの比較、対外世界や周辺地域からみた日米関係といった企画をくんでほしい。すでに今回の特集のなかでその方向性はいくつも提示されている。米国と安全保障にかかわる条約を持つ他国の基地状況との比較、ロシアや中国のみならず、東南アジア、中央アジア、中東などの諸外国、あるいは沖縄以外に山口（岩国）、長崎（佐世保）、青森（三沢）、神奈川（横須賀）など地方の多様な視線を含む方向から、日米関係を整理したらどうなるか。「知られざる」日米関係の意味と局面が析出できよう。

第2に、これは第1の論点ともつながるのだが、本書に政策サークルからの寄稿が多い点が残念に思う。外務省などで現在、政策そのものにかかわっている直近の担当者は無理にしても、在外公館や政策実務で活躍された経験をもつ関係者、例えば、思いだけでも、加藤良三（前駐米大使）、北野充、兼原信克（ともに駐米公使の経験あり）、谷口智彦（元外務副報道官）といった知米派でありながらも世界を熟知し、かつ広報面にも理解のある方々ならば喜んで協力されたように思う。こういった面々が1人でも2人でも寄稿していたら、よりアクチュアルな観点から本特集に厚みをもたせることができたに違いない。同様に、米国の寄稿者は組織できなかったのだろうか。沖縄が主要な論点の1つとなる以上、シーラ・スミス（外交問題評議会）のエッセイを読みたかった。政権入りしたジェフリー・ペーダーやデレク・ミッチェルは無理でも、リチャード・サミュエルズ(MIT)、(『フォーリン・アフェアーズ』に普天間問題について寄稿した) ジョージ・パッカード、台湾に詳しいリチャード・ブッシュ（ブルッキングス研究所）やロシア研究者だが日米関係にも理解が深いアンドリュー・クチンス（CSIS）などの議論がカバーされていたら、特集はより広がりや深みを増したであろう（ただし、ケント・カルダー、マイケル・グリーン、ジョセフ・ナイなど、日本の新聞での露出が多い大御所たちはみな知っているので雑誌の特集向けではない）。次の企画はぜひこれらの関係者も招請し、二カ国間の言説を乗り越え、多面的な未来指向でやってほしい。

最後に、もう一つの注文を出すとすれば、同様の特集を日ロや日中、あるいはそれをこえたユーラシアとの関係でやってほしいものだ。本書の3600円という値段は、単なる総合雑誌の域を越えている。これは一種のシリーズのなかの単行本であり、また寄せ集め論文

かけたものにすぎない。その意味で、歴史叙述がほぼすべて、終章に今後の展望を抽象的にさわるだけといった、日本のオーソドックスな研究スタイルとは一線を画している。例えば、『中・ロ国境 4000 キロ』は、結果として、国境問題解決プロセスとしての「フィフティ・フィフティ」を抽出するための予備作業となったし、『北方領土問題』における日ロ関係への適用がその具体的なケースである。本書評を読まれた方には、なにとぞ、私を今後、歴史研究プロジェクトにお誘いくださらぬようお願いしたい。

集の類でもない。編集サイドの今後の奮闘をさらに期待したい。

岩下明裕（いわした あきひろ）

北海道大学スラブ研究センター教授。研究テーマは、国境学・ユーラシア国際政治。

***なお、エッセイの内容は、スラブ研究センターを始め、いかなる機関を代表するものではなく、評者個人の見解です。**